



～お知らせ～

新潟地方気象台は6月11日に北陸地方（新潟県、富山県、石川県）が梅雨入りしたとみられると発表しました。6月11日の梅雨入りは平年並みで、昨年より5日遅いとのこと。過去の気象庁のデータを調べてみると北陸地方の梅雨明けは7月23日ごろとなっています。今しばらくの我慢ですね。



梅雨というと昔は、紫陽花、カタツムリ、雨傘や長靴などしっとりとしたイメージでしたが、最近は“線上降水帯”なるものが発生し全国に大きな被害をもたらしています。9～10日にかけて九州の福岡、大分、佐賀の3県で短時間に大雨をもたらす線上降水帯が発生し大規模な土石流が発生するなど大きな被害が発生しています。北陸地方においてもゲリラ的な豪雨が各地で起こっているとのこと。天気予報等の情報をしっかりと把握し身の安全を確保してください。

飲み友達にアマチュア写真家がいる。彼の被写体は「祭」だ。定年後、全国の祭りを巡っている。コロナ禍も沈静化したことより復活した夏祭りも少なくないようだ。東北四大祭り「青森ねぶた祭（8月2日から7日）」、「秋田竿灯まつり（8月3日から6日）」、「山形花笠まつり（8月5日から7日）」、「仙台七夕まつり（8月6日から8日）」。富山の「おわら風の盆（9月1日から3日）」。徳島の「阿波おどり（8月12日から15日）」。京都の「祇園祭（7月）」などが全国でも有名な夏祭りだ。北陸では、富山の「おわら」のほか、新潟の「新潟まつり（8月4日から6日）」、石川県の能登の「キリコ祭り（7月から9月）」などに人気がある。夏休みの家族旅行でいかがですか。

ここで我が故郷の「おわら風の盆」について一講釈です。立春から数えて二百十日、初秋の風が吹くころ、おわら風の盆は幕開けを迎えます。揃いの浴衣に編笠をつけ、実に幻想的であり優美に舞う姿は今も昔も多くの人々を魅了します。おわらの歌詞の基本は他の民謡と同じく七、七、七、五の26文字で形成されています。そして最後の5文字の前に必ず「オウラ」と入ります。これは、おわら語源説の「おわらい節」の名残りと言われています。

この26文字の歌を「正調おわら」または「ひらうた」といい、他に、この正調おわらの頭に5文字をかぶせて31文字として唄う「五文字冠り」や七、七七と言葉を重ねていき最後に5文字で結ぶ「字余り」などがあります。これら「五文字冠り」や「字余り」は唄い手の力量が試されるおわらの味わいどころです。おわらは他の民謡と同様に、はじめは唄だけでしたが、そのうち楽器が入り、踊りが入ってきました。時代と共に踊りも変わり現在は、1.「豊年踊り」（旧踊り） 2.「男踊り」 3.「女踊り」（四季の踊り）と3通りの踊りがあります。明治44年の「北陸タイムス（北日本新聞の前身）千号記念」に、そのイベントの一つとして八尾のおわらが登場し、芸者たちが即興で踊ったのが始まりといわれています。



おわらに欠かせない役割を担っているのが唄と楽器で奏でる「地方」です。地方は「唄い手」「囃子」「三味線」「太鼓」「胡弓」をいいます。三味線が出を弾き、胡弓が追います。太鼓が軽く叩かれ調子を上げると囃子が唄を誘います。唄は甲高い声で唄い出し息継ぎなしに詞の小節をうねらせ、唄は楽器にこえ、楽器は唄にこえます。唄が終わると「合の手」と呼ばれる楽器だけの間、奏曲が奏でられます。唄の旋律とまったく違う曲を演奏することは民謡では珍しいことといわれています。

おわらにはなくてはならない哀調の音色を奏でる胡弓ですが、八尾では「目立ってはいけない楽器」として教えられる楽器です。胡弓が松本勘玄によって取り入れられたのは、比較的新しい明治40年代のことです。輪島塗の旅職人であった勘玄が八尾に来たのは20歳の頃、明治30年代のことでした。勘玄は大阪で浄瑠璃修行をしていたことがあり、義太夫、端唄、長唄、小唄とあらゆる三味線音楽に通じていました。ある日八尾に越後瞽女の佐藤千代が訪れ、勘玄は胡弓に出会います。以来、おわらの唄と三味線に胡弓を合わせようと、日夜研究に励みました。その苦心の結果現在の哀愁を帯びた独特の旋律が生み出されました。

越中八尾観光協会HPより

暑い夏になりました！
しっかり水分や栄養をとり体力を養ってください！



- 「ウィークリースタンスの徹底を」お願いします
- ① 昼休みや16時以降開始の打合せは行わない
 - ② 休日明け日（月曜日等）は依頼の期限日としない
 - ③ 休前日（金曜日）は新たな依頼をしない
 - ④ ノー残業デー（水曜日）は勤務時間外の依頼はしない

〇必見！ ホームページをご覧ください！ 新たな情報等があれば教えて下さい

www.hokurikuyouchi.co.jp

〇お願い！ 「Aipo」を活用しましょう